鹿児島県立川内高等学校
校長通信
第４号（令和8年6月10日／校長 大倉秀心）

校訓「自律　敬愛　剛健」
鹿児島県薩摩川内市御陵下町６番３号
電話 (0996) 23-7274
FAX (0996) 22-1542

「私大250校削減案」

私は、「読売新聞ワークシート通信」という、中高生向けの新聞記事を抽出し、その記事についての意見をまとめさせるワークシート型の配信記事を購読しているのですが、先日、標記見出しの「私大250校削減案」が目に留まりました。（6月3日付け）

少子化で私大の約半数が定員割れに陥っているためで、財務省は2040年までに少なくとも250校、学部定員にして14万人程度を減らす必要があると、初めて数値目標を公表したのです。

18歳人口は1992年の205万人から減少に転じ、2024年時点で109万人。この間、政府の規制緩和もあり私大は増え続け、1992年の384校から2024年には624校に。2025年度調査では、その私大の53%が定員割れに陥っているというわけです。

学生数が減ると分かっていながら大学の数を増やしたのですから、当然の帰結としてこの状況は予測できたはずで、国の政策を責めたくもなります。ただここで、政府を非難しても状況は変わらないので、現役高校生の皆さんは粛々と世の中の現状の把握に努めてほしいと思うのです。

その大学は君が「行くべき大学」か

財務省は縮減案の説明資料で、定員割れした私大の講義内容の一例として、「四則演算から始める。少し背伸びして微分などの理解」「（英語の）文型の基本とbe動詞の整理」などを挙げています。「義務教育で学ぶ内容の授業が行われている大学もある。助成金の支出に見合った教育の質が確保されているか疑問だ」として大胆な規模縮小を主張しているのです。

大学で四則演算（足し算・引き算・掛け算・割り算）から始めるなど、にわかに信じがたいことですが、こういう情報も大学側から積極的に語られることはないと思われるので、その大学の近年の受験者数や合格者数及び入学者数（つまり受験倍率や定員充足率）などと併せて自分から「表には出ていない情報」を得る努力は必要になるでしょう。何も考えず「入れる大学」を選択すると、入学後「こんなはずじゃなかった」と後悔することになるかもしれません。

信頼できる情報を自分の手で

財務省の見解に対し、松本文科相は、「機械的に判断するのではなく、分野や地域のバランスを図ることが重要だ」と述べています。地域の産業、医療・福祉、社会インフラを支える人材輩出機能を持つ大学の維持は必要だとしています。確かに定員を満たしていなくても、地域の生活基盤を支える人材を長年継続して輩出している私立大学もあるので、一律に「定員を割っているから問題のある大学」ということにはならないでしょう。

とはいえ、文科省も「私大縮減は避けられない」と認めています。AI（人工知能）や半導体などの成長分野や地域の人材需要に応える大学を重点的に支援する補助金の交付にメリハリをつけることで、立ち行かなくなる大学に撤退を促す道筋を描いているといいます。

大切なのは、受験生がオープンキャンパスなど表面的な大学からの情報だけを鵜呑みにするのではなく、在学生や卒業生の声を含め、様々な情報チャンネルから信頼できる情報を取捨選択して、最後は自分の判断で、自分が「行くべき大学」を決めることなのです。その大学で自分がすべきことが思い描けているか。その大学に自分がすべきことが実現できる環境があるのか。そこがポイントになるでしょう。

「2040年」

先月末、全国高等学校長協会総会・研究協議会に出席してきました。国公私立高校の校長が一堂に会する年に一度の大きな会で、著名人による講演や、文科省からの行政説明なども行われます。その説明を

聞きながら気づいたことが一つありました。

どうやら国は、「2040年」という年を一つの目途に何か大きな動きを作ろうとしているということです。上で述べた「私大250校削減案」が2040年をタイムリミットとしていることも偶然ではないでしょう。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、18歳人口は2035年に100万人を割り込み、2040年には74万人まで減るということです。これを聞いて皆さんはただ、「ふーん」と思うでしょうか。想像力を働かせてください。2040年とは今から、14年後。つまり、高1・高2・高3の生徒の皆さんがそれぞれ30歳・31歳・32歳になっている年です。仕事にも慣れはじめ、新入社員の指導なども任される年代になる頃です。結婚して家庭を持っている人もいるかもしれない、そんな年です。

文科省の説明資料の中に、「2040年の人材需要予測（職種別）」というのがありました。際立っていた数字が、「AI・ロボット等活用人材、約339万不足」「事務職、約437万余剰」というものでした。

これを学歴別にみると、「大卒・院卒の理系人材で約120万不足」「大卒・院卒の文系人材で約80万余る」ということらしい。この数字を見て皆さんは何を考えますか。2040年には自分はすでに大学も出て就職しているから関係ないといえるでしょうか。その頃、皆さんがどのような職場でどのような仕事をしているかはまだ想像できないかもしれませんが、この2040年の人材需要予測が皆さんの就職活動内容にも少なからず影響を与えている可能性があることを忘れてはなりません。

文系・理系の垣根がなくなる

このような人材需要予測を見て、「じゃあ、理系に進みましょう」と単純に考えればいいのか。そういうわけでもありません。人にはそれぞれ得意・不得意、好き・嫌いがありますから、全員理系に進めばよいというわけにもいかないでしょう。

でも、少なくともこれまでのような、「数学が苦手だから文系」「国語が嫌いだから理系」のというような考え方には意味がなくなってくるでしょう。文系・理系の枠を超えて、数理・データサイエンス・AIの活用は様々な分野で必須となるといわれているからです。「未知の遺跡はAIで発掘...3次元地形データと組み合わせ、古墳や寺院跡35か所発見」「歴史学の未来 AIは膨大な史料から何を見出せるか?」「第一三共、データ駆動でスピード創薬　化合物解析3倍速」などの記事が紹介され説明されていました。

AIと「競合」するか、AIを「部下」にするか

「ホワイトカラーは今後2種類に分かれる」という資料にも興味がわきました。

①AIに代替される人（デスクワーク遂行者＝部下＝AIと競合する人）

→かつての“仕事ができる人”とは、「決められたルールの中で、正確に早くこなせる人」「上司の指示をよく理解して的確に遂行する人」だったが今、ルールがあればAIがその多くを代替してくれる。

②AIに何をさせるかを決め、方向性を示す人（指示者＝ボス＝AIを部下にする人）

→ルールを設計すること、ルールを壊すこと、ルールを捨てて問いを立てること。そこにしか人間の存在価値は残らない。

※ホワイトカラー：白いワイシャツを着てオフィスで働く姿から名付けられた。主な職種として事務、企画、マーケティング、エンジニア、管理職など。主にデスクワークや頭脳労働を担当する。←→ブルーカラー：工場などで汚れが目立たない青い作業服を着ていたことに由来。

では、我々はどうすればいいのか

『AIを使いこなし、イノベーションを起こすためには本質的な能力を育むことが何より重要になる。本質的な能力とは、多様なものの見方や好奇心を土台とした、高い状況認識能力や共感力、コミュニケーション力、論理的思考能力、推論能力などによって発揮される豊かな創造力だ。アイディアの種をつないで新たな価値を生み出すことは人にしかできないし、適切な言葉で表現できなければAIを使いこなすことはできない。また、五感を通じた状況の把握や社会性も、AIが苦手とする分野である。』

このように説明されていました。川内高校生の皆さんが主体的に自分の頭で考え行動を起こすことを期待しています。